

No. 351【2019年4月5日配信】

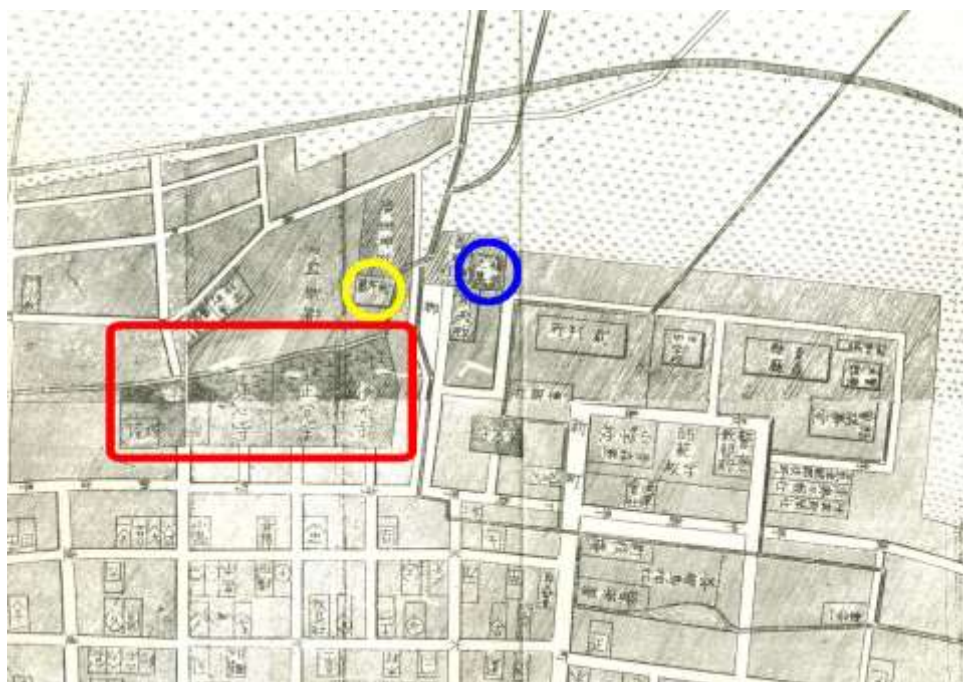
墓地移転シリーズ その1 (担当:工藤)

こんにちは! 室長の工藤です。

新年度となり、このメールマガジンも8回目の春を迎えることになりました。今年度も毎週1回、青森市の歴史にまつわる話題を提供していきます。

さて、昨年度私の担当回では、「市役所庁舎の変遷」について継続的に紹介してきました。今年度は「墓地移転」をテーマに、これもまた数回に分けて紹介していきます。この「墓地移転」問題は、青森市の町づくり・都市計画との関わりで重要なテーマで、最終的には昭和22年(1947)の三内霊園への墓地移転開始で収束します。しかし、これを通史的に扱ったものはないので、このメールマガジンを通じてひもといいたいと思います。ただ、資料集めから始めていくことになるので、ゆっくりとした歩みにはなりますが…。

それではまず、「墓地」は一体どこにあったのかというところから始めましょう。時期は19世紀の末、明治20年代～30年代初めです。明治25年(1892)の地図に目をやると、常光寺・正覚寺・蓮心寺・蓮華寺の境内北側に墓標を示す地図記号があります。ですから、各寺院の境内にお墓があったことがわかります。なお、この辺りは藩政時代から寺町と呼ばれていました。次に、寺町を西に進み柳町通りを南に折れると香取神社がありその西隅に「神道之墓」があります。さらに、柳町通りを挟んで東側には箱館戦争で戦死した兵士の墓である「戦死墓」があります。



墓地の位置(明治25年発行『青森実地明細絵図』)

※赤い線で囲んだ4か寺の境内北側に墓地がありました。また、青い線で囲んだ場所には「神道之墓」が、黄色の線で囲んだ場所には「戦死墓」がありました。

寺町は藩政時代の青森町南端部で、それはこの当時もおおむね変わりません。ですから、明治20年代の青森町の南側には墓地があったというイメージになります。そしてこの頃、これらの墓地が衛生上よくないと論じる人々が出てくるようになりました。青森衛生会という組織が建議書を提出した(提出先は不詳)という話もあるようです。

そんな折、青森町にとって大きな出来事が起きます。明治 31 年の市制施行です。当時、市制を施行するためには一定以上の人口が必要とされたのですが、青森町単独ではそれに満たなかったのです。そこで、青森町と周辺村との合併が企図され、南隣の浦町村は明治 31 年 10 月 1 日に青森町と合併し、これを背景に市制が実現したのです。

一方、これによって旧青森町の墓地は、旧浦町村との間に挟まれる格好となったのです。

翌明治 32 年 5 月 20 日付『東奥日報』の第 1 面には、紙面の半分ほどのスペースを使って「墓地転換私擬案」と題する論説が掲載されました。執筆をしたのは、当時の青森市助役である川田水穂です。川田は、これまでの衛生上の問題という視点ではなく、市制施行後の町づくりを意識して寺町の墓地移転を主張しました。

次回の担当回では、川田水穂が主張した墓地移転論を紹介します。